
青春バイタリティ

かなで

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春バイタリテイ

【Nコード】

N9839A

【作者名】

かなで

【あらすじ】

アタシとアンタ。踏み出せない、そんな関係。オレとオマエ。壊せない。そういう関係。

言わない関係（前書き）

初と言うことで拙い文章でごめんなさい。
これから頑張るのでよろしくお願いします!!

言わない関係

「あ、あのね！」

「あ、あのさ！」

勢い良く重なった声に、目を見開いた。

- 言わない関係 -

「なに？」

まただ。

何か、変な感じ。

「オマエから言えよ。」

何か、ちよつとむかつく。

「アンタから言つてよ。」

素っ気無く言い返して、机の上のノートに目を戻した。

「……っえ、その……」

何だ、その戸惑いは。

あーとかうーとか唸ってる奴を視界の端に捕らえながら、ノートにペンをはしらせた。

時は、7月最後の火曜日。

夏休みの自習教室。

今日はアタシとこの唸っている幼馴染の2人だけだ。

今2年生は研修旅行中、3年生は進学補習とまあ、訪れる人は殆どいないのだが。

そもそもこの教室の席が埋まるのは、8月も下旬になってのこと。夏休みも終わりに近づいて、やっていない宿題に気付いた奴らが焦って訪れる。

まあ・・・今はそんなこと関係無い、か。

解答をチェックしながら隣で黙ったままの幼馴染に目を向けた。

幼いころの記憶などもう、とうの昔に薄れて消えてしまったが。

思い出せる1番古い記憶には、もうコイツがいた。

生まれたときにはもか隣の家で、小・中・高とばっちり同じでクラスが離れたこともない。

奇跡だと思う。

まあ、そんなこと絶対言わないけど。

何を間違えたのかアタシは今奴に恋をしていて。

なんていうか、今時マンガでも幼馴染の恋なんてないし。

まあ好きになったんだからしょうがないとも思っけど。

馬鹿だけどこぞという時に元気付けてくれる

喧嘩は弱いけどへらへら笑ってかわしちゃうし

何処が好きと聞かれても困るんだけどね。

恋はそういうものだとも思うけど。

好きになったから好きなんだよ。

何処が、とか

どうして、とか

そんなことは関係ない。

「あのさあ、…」

でも、言うんだか言わないんだかはつきりしてほしい。

「うん。言うなら早く言つてよ。」

まあ、うるたえてるアンタを見るのも面白いけどね。

朝頑張ってセットしてた髪形がぐちゃぐちゃになってるよ？
格好つけたって変わらないのになえ？

「俺ね、オマエがさあ…」

知ってるよ。

アンタも同じこと考えてる、って。

「うん。何？」

現に相も変わらず側に居る。

「その……」

でもね、

「…うん」

絶対アタシから好きだなんて言ってるやんない。

ここは女としては譲れないところだ。

アンタはまだまだ言ってくれそうにないけど。

「オレはオマエが……その……」

ああ、ほら、まだ、アンタは言えずにいる。

まだ、壊せずにいる。

壊せずにいる。

この強くも脆い関係。

アタシからは絶対言わないんだから。

アタシからは絶対言わないんだから。

アタシからは、絶対。

言わない関係。

いつか。いつか。

言わない関係（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか。

もしよかったら

感想、評価どしどし言っちゃって下さい
泣いて喜びます。

言えない関係

「あ、あのね！」

「あ、あのさ！」

あーもうなんなんだよ。

- 言えない関係 -

「なに？」

またかよ。

この年寄り夫婦のようなタイミングの良さ。
嫌になるくらい良いじゃねえの。

「オマエから言えよ。」

ちょっとこの状況の奪回を図ろうと、えらそうに言ってみた。
微かに震えている右手には気付かないで欲しい。

「アンタから言ってよ。」

言い返された。

この気の強い女は、生まれて以来16年ずつと一緒に育った幼馴染。

「・・・っえ、その・・・」

オレとしたことがうろたえてしまった。

なんと言おうか、とにかくオレはこいつに惚れている。

今時ドラマにも、ってか昔にもあり得ねえよーな話だなあ、オイ。

まじで。

気は強えし、力は強えし、ちょっとした最強の女。

ケンカして1回も勝った記憶がない。

そんな女。

まあ、オレが弱いってのもあるんだけどなあ...

いわゆるデコボココンビみたいなもんだ。

「あのさあ、...」

で、この状況。

一世一代の決心をつけたはずなのに。

いざとなるとまあ、その決心も揺らいでしまふというか。

総崩れというか、もう、...

穴があつたら入りたいよ、オレは。

もぐりこみたいくらいだ、もうここに掘りますよ？穴。

「うん。言つなら早く言つてよ。」

急かされた。

「オレね、オマエがさあ……」

好きなんだ。

………とか言えるわけねーだろがー！

オレの馬鹿……いや、これはもうバレてるだろ。
なあ？ なあ？

気付いてんなら言ってくれよ。

「うん。何？」

ちらりと盗み見ればいつもと変わらない表情。
そのすました顔が少し憎らしくもある。

つまるところ

同じ気持ちなら良いと思う。

「その……」

だけどさあ、

やっぱ言えない。

「…うん」

ああ、またその大人びた顔。

オマエはいつもオレの前に行く。
たまには立ち止まって待ってくれ。

ああ、堂々巡り。

断ち切れるわけ無い。
踏み出せない。
言えない。
たった2文字の言葉。

「オレはオマエが……その……」

『好き』だ。

ボーダーライン。

壊したくない。壊せない。

進みたい。進めない。

この強くも脆い関係。

たったの2文字なのに言えない。

たったの2文字なのに言えない。

ああ、まだだ、まだ、言えない。

言えない関係

きつと。きつと。

言えない関係（後書き）

はい。言わないのアンタ（2話のオレ）目線でした。
読んでいただきありがとうございますv

評価頂ければそれはもう、号泣します。
では、次回も読んでくださいねv

言われる関係

「そんなわけ無いじゃない!!」

「そんなわけ無えって!!」

ああ、ほら、また

重なる声。

- 言われる関係 -

「...いや、そんな必死に否定せんでもええやんか。」

煩い関西弁がやってきた。

「だからどう見たらアタシ（オレ）がコイツと恋人になるのよ（んだよ）!!」

いい加減にしたいものだ。

一緒に過ごした歲月というのは、どうやら消えそうにも無いのだけ
ど。

重なる声のタイミング、
言うことは殆ど同じ。

幼馴染という絆はがゆいほどに、強く。

時は10月初め。

秋晴れ。

放課後の教室。

「照れんでええやんか。どっからどう見ても夫婦みたいやで?」

少し冷たくなり始めた風に、爽やかに笑う関西野郎の顔が憎らしい。スポーツ推薦で大阪からやってきたらしい彼はバスケット部のエース。

185cmの身長にそれなり美形の顔。

まあ所謂学校のアイドルといったところ。

なんて言うか、

コイツとは大違いだ。

身長・体重・顔

どれをとっても平均的。普通。

よく言えば悪いところは無し。

悪く言えば良いところも無し。

そんなことはどうでもいいと言ったのはアタシだけだね。

「なあ？そう思うやる？」

知らない間に会話が進んでいたらしい。

関西野郎の窓枠の上で組んだ腕が少し窮屈そうだ。

「あ、や、ゴメン。聞いてなかった。」

隣にはホツとしたような顔。

何だ。

アタシに聞かれちゃ不味い話ってこと？

成る程つまりはアタシのことでしょう？

見事に顔に出ていますよ？

私的結論に達したところ、窓から近づいてくる綺麗な顔。

どうやら関西の人が教えてくれるみたい。

「あんな。コイツがなあ……………ッむ？」

だっ たんだけど…

モゴモゴ

「おまえは…馬鹿か!!」

ベチッ

あらあら、非常に良い音ですこと。

幼馴染さんは相当その話をされたくないよーで。

「ったあ…何すんねんな、………安心しいや、言わへんってな。」

…って結局言わないんですか。そうですか。
言ってくれると期待してたんだけどな。

それよりなにより、

口ふさがれて、

頭叩かれて、

それでも笑ってるこの人は大丈夫ですか。

しかも結構痛そうだったのに…

本当に大丈夫なのかな？この人。

少しうろたえるアタシを後目に関西野郎はにっこり。
結局のところ奴の考えることはわからない。
いつだってにっこり。
ずっとにっこり。

にっこり。にっこり。

…まさかとは思いますが、アタシ達をからかって暇つぶししてるんですか？

ちらりと上を見上げると、アタシの顔を見て笑みを深めやがった。

なんて奴だ。

鈍感な幼馴染さんは気づいてないようですけどね、関西野郎のお楽しみだってことに。

……で、まあ何の話？

「え…何？何の話なの？」

関西くんは少し思案顔。

まあ、さっき言わないって言ったもんね。
簡単に教えてくれるとは思ってないけど。
あなたにとっては暇つぶしなわけですね。

そんな、そんな、
駄目元の問いに、

関西のお兄さんはアタシの耳元でこう答えられました。

「アンタが一番よおわかってるやろ。」
と。

単 純 明 快 。
非常に簡潔な答えですこと。
その上、確かに言っていないですね。

「勘の良い人ですこと。」

アタシの予想は的中したということですね。

そう思いながら皮肉って奴の耳元へ言い返す。
関西野郎はどうもこうもかなりの策士。
今回はアタシの負けね。

綺麗な顔が憎らしい。

と関西野郎との勝負にピリオドがついたところ、急に身を乗り出す隣の席。

「……………って何の話してんだよ。2人してよそよそしい。」

ちよつと強がってるところが可愛い。

いつ声を出そうかなり迷っていたでしょう？

視線うるうる、手にはかなりの力が入ってますよ？

可愛い奴。

関西野郎はクスクス笑いが止まらないご様子。

「何が可笑しいんだよ？」

だってホラ、アンタの

アンタの今朝も頑張ってセットした髪の毛。

さっき暴れた所為でぐちゃぐちゃ。

「……………何とか言えって。」

何のことが解らないのか、少しお怒りですか？
くちびるとがってるし。

あー…どうする？

やっぱり想い人が怒るってのは困ります。
女としては。

勿論それが長年一緒に過ごした幼馴染であつても。

迷った挙句、未だ笑い続ける関西野郎に視線を向けた。

…すぐに察しがついたらしい。

「…つく。…まあまあ、とにかく鏡見てみいや。」

ナイスフォローー

何で高校男子のズボンのポケットから折りたたみ式の鏡が出てくるのかは理解不能だけど。

まあ身だしなみに気を使う年頃ですからね。
隣のボクでさえ毎朝気合十分ですからね。

とにかく助けていただき感謝しますよ？

「…っあー！！」

そんな焦って髪を撫で付ける様子にさえドキリとするアタシは重症なのかも。

関西野郎はアタシの考えを察したようで、にやにや倍增。
何かかなりむかつくんですけど。

「自分ら見てたら、ほんまおもしろいなあ……」

前髪をかきあげながら、さぞ楽しそうに言い放った。
その様子が様になっているのが更に憎らしいですね。

格好良さ余って憎さ10000倍でしたっけ？

とにかく、

「「おもしろないってば……」」

ここでもアタシたちの声を重ねちゃうなんて、
あなたもやりますね、絆さん。

あなたの所為で、また関西野郎の笑みが深くなる。
そして、そして簡単に予想できる次の言葉。

「自分らやっぱ夫婦みたいやなあ……？」

ああ、何て口惜しい。

こんな奴にごときにアタシがからかわれてるだなんて。絆さん。当分はアナタが一番の敵ですね。

ああ、もう

「「なんでやねん!!」」

関西弁で反撃に出るつもりが、ずばり相手の思っ壺。二人して被る関西弁、絆さんの仕業としか思えませんか。

ああ、ホラ、

あなたの所為で、また言われてしまう。

「それって夫婦漫才やろ？自分ら夫婦決定やな。」

馬鹿野郎。

太くアタシ達を縛る絆。

周りから恋人みたいだと、言われるのに。

周りから恋人みたいだと、言われるのに。

いつだって言われるのに。

まだ、アタシたちは進めない。

言われる関係

嗚呼、何て、

恋とは盲目。

言われる関係（後書き）

この話はただ単に関西野郎を出したかっただけの話です。嘘です
関西野郎は突然現れたキャラですが、これから重要になる予定だっ
たりそうじゃなかったり。

でも良いキャラしてると思うので可愛がってやってください。

それでは、読んでいただきありがとうございますv

次作もよろしくです。

言いたい関係・前（前書き）

約1年ぶりの更新ですが、大幅修正しました。
だいぶ納得のいくものになったのでーぞ！

言いたい関係・前

「あ！」

「「え？」」

今日は、どうも、すれ違い曜日。

—言いたい関係・前—

「お、ボクちゃんやん」

「で、何か用？」

ご機嫌麗しゅう？

目の前で幼馴染と関西のお兄さんは至極綺麗に微笑んでいらつしやる。

ほう。俺なんかが隣に居るよりも数倍輝いて見えるね、これは。教室の廊下に面した窓枠から見えるのは上半身だけなのにね、妬けるね。

「あ、いや、なんでオマエと関西野郎と一緒に居るんだ？」

そもそも同じクラスでも無いのに知り合いつてのが意味解んね。幼馴染と関西野郎を見比べながら訊ねる。
しかしお似合いだな、コイツら。

「んー？だつて俺ら付き合つてるもんなあ？」

そう言つて関西人は幼馴染の肩に手を回してにんまり。

うーわーコレ完全にかかわれてますよね。僕。

っーか嫌がれよオマエも。

何かちよつと嬉しそうに見えるしな。

もつとあるだろ、反応が。

こう、ほら、振り払うとか、殴るとか殴るとか殴るとかさ…

「関西人は黙つて頂戴。で、何か用？」

アンケートならちゃんと回したし、まさか失くしたなんて言わないでよ。」

辛辣に冷たい調子で吐かれた言葉には少しの棘。

え。何かお姉さん不機嫌ですか？

心なしが貼り付けた笑顔が引きつってるような。目、笑ってないし。

「…、アンケートなら俺もちゃんと…あ。」

回してないよ、俺。

うわーあれ確か期限あつたよね。

ちらりと顔を見るとお姉さん呆れ顔。

関西野郎は笑いを噛み殺している。クツクツ。

「アンタつて…期限は明日だから今日中に残りの人回って集めなさいよ。」

はあ。と最後にあからさまな溜め息をついて、
どうしようもないわ。とでも言うように関西野郎と視線を交わした。

何なんだよ。意味ありげ。

「解った？」

妙に大人びた雰囲気为首を傾げるから、俺はちよつとうるたえてしまう。

何かあれだよな、子供扱いされた感じ。

日に日に綺麗になって、俺取り残されたような感じ。

関西野郎も何だかんだ言つてすっげー落ち着いててさ、大人な感じで、俺独りかよ。

うだうだ考えてたら幼馴染は返事を促す様にもう一度くびを傾けた。

「お、おう、ちゃんとするよ。」

拍子抜かれたように慌てて返事して、鞆をあさる。

許容量の倍は挟まれているようなファイルの中でへろへろになったアンケートを発見。

「なんやねんそれ、へロへロやんけ！湯葉並やんけ！」

空いている左手で指さしながら関西野郎は盛大に突っ込んだ。

「つかまだ肩抱いてんのかよ。離せよ。」

廊下通る人通る人に「お似合いよね。」とか言われちゃってるよ。

関西野郎もの凄く嬉しそうなんですけど。

イライラ。

「…まあ見つかっただけね。」

幼馴染はまたまた意味ありげに関西野郎と目配せ。

目を細めて眩しそうに笑う。

イライライライラ。

「そうやな。ボクのこの何ちゅーか物凄い机からよー出できたわ。」

クツクツと笑いを噛み殺したように言う。

幼馴染に向けられた視線は柔らか。

何だこのピンクな空気。

イライライライライラ。

「馬鹿にすんなよ。」

あ、拗ねた感じになった。

俺マジで子供みたいじゃん…

何かすっげー恥ずかしいんだけど。

「・・・つぶ。」

関西野郎耐え切れず笑っちゃったよ。

穴があつたら入りたいですよ。ホント。まじでここに掘りますよ、穴？

あ、コレ前にも思ってたっけ…？

「…わ…笑っちゃ駄目ツ・だて…ばあっ…」。

いやいやお姉さんの方が笑って…ってな、え、

何で関西野郎に寄りかかっちゃってるんですか！

『んー？だつて俺ら付き合つてるもんなあ？』

え？何？まさか本当？

関西野郎の冗談めいた言葉が頭の中でエンドレスリピート。

オマエが俺のこと好きだと思つてたの俺の妄想？

「も、何ちゅーか、ほんま、お子ちゃまやなあ。」

まだ小刻みに肩を震わして笑いを耐える幼馴染の、其の肩に乘せられた腕が憎い。

其の手を振り払おうともしないオマエにも腹が立つ。

こんな嫉妬心。自分勝手に下らないってそう、解つてゐるつもりだけど。

生まれてからずっと一緒に、俺がまだ触れられずにいる其の肩を、知り合つてまだ半年も経たない男の其の腕が触れていることに焦る。其の腕を受け入れているオマエの無防備に腹が立つ。

こんな焦燥。馬鹿みたいだつて、そうオマエに言われそうだけど。

いつだつて関西野郎は俺を馬鹿にして笑うけど、

そんな時はちよつと怒つて流せたのに、何か今はすっげー苛付く。

眉間に皺が寄る。

拳に力が入つて震える。

唇を噛み締める。

其れは、紛れも無い ”嫉妬”

何時もと違う様子の俺に気付いたのか、幼馴染は表情を変える。
関西野郎は納得したかの様に目を細める。

「やってらんね。」

居た堪れなくなって鞆を手に教室を出ようとする。
もうこれ以上2人を見ることに耐えらんねえ。

「えっ…あ、アンタ帰るの？」

オマエは窓枠から身を乗り出して訊く。
その向こうで関西野郎は読めない表情。

「別にオマエに関係無いじゃん。」

教室の空気が凍る。

「…だ、だってまだ午後の授業残って……」

授業の心配？

「オマエには別に関係ねーだろ。」

オマエは少し泣きそうに顔を歪める。
そんな様子を俺に気付かせない様にか、いつもの笑みで言う。

「ほ…ら、アンケートもあるでしょ。アタシもついてってあげるよ。
ね。」

でも戸惑ってる空気は隠せない。

だって生まれてからずっと一緒なんだぜ？

まあ、それも俺の独りよがりかもしれない。

オマエは俺の知らないところでどんな顔で笑う？

関西野郎と何を話し？独りで何を想う？

「だから、関係ねえつつってんだろ。放っとけよ。」

隠し切れない、そんな哀しさをオマエは瞳に浮かべる。

揺れる。違うんだ、そんな顔をさせたいんじゃない。

ただもう耐え切れないんだよ、俺が弱いだけだ。

抱えられずに、捨てられずに、結局はオマエを傷つけてしまう。

お願いだからもう何も言わないでくれ。

傷つきたいわけじゃないんだ。だから、なにも言っな。

その願いを裏切って、オマエは顔をふせながら言う。

表情は解らないが何時もの芯の通った声は少し震えて…

「…っ関係無くないよ。だって、アタシたち幼馴染でしょ？

ちゃんとアンタのこと見てなきゃ、アタシがおばさんに怒られちゃうじゃん。」

一息に紡ぐ。

そうだ。俺はその関係に耐えられないんだよ。

前にも進めず、後ろにも戻れない、

断ち切れずに雁字搦めに俺を捉えつつけるその関係に。

「じゃあ、もう終わり。そうやって幼馴染とか持ち出すの止めてくれない。」

もう、関係ねーから。」

臉を伏せながら、一気に言葉を吐き出す。

思ったよりも温度の無い、無機質な言葉が零れて驚いた。

もう、これで本当に終わりにしてくれ。

でないと、次俺の口から零れる言葉は何なのか、怖いんだよ。

もうこれ以上哀しい顔、声は見たくない聞きたくない。

もう堪らなくて、教室を出て二人と逆方向にある階段へ向かうとした俺をオマエは引き止める。

どうして、解らないんだ。

掴まれた右腕が熱くて、振り返らずに行こうとすると、思った以上に強い力で掴まれてて振り払えない。

そのままの状態でオマエは言う。

「な、んで、急に怒るの？よくわかつ…な、い…よ？」

その声には嗚咽さえ混じってて、俺は顔を顰めた。

周りの視線が少し痛い。

「だから、まじで関係ねえ、って言ってんじゃん。離せよ。」

掴まれた其の力が抜ける。息を呑む音。

覚悟を決めて振り返ると、関西野郎と目があう。

其の刹那、乾いた音が響く。

「も、訳解んないよ。」

走り去る君の顔は、叩かれた俺の其より痛く、哀しそうに見えた。

言いたい関係・前（後書き）

後編に続きます。

言いたい関係・後

駆け抜けたおまえの香を追いかけてもできず。
其の場所から立ち去ることも出来ずに、
俺は立ち尽くした。

関西野郎も動かない。

- 言いたい関係・後 -

「っ痛あつ…」

右手を叩かれた頬に当てて小さく呻く。

自分の痛みなんかよりも、

大きな痛みをオマエに与えて、何してんだ、俺。

頬を押さえる俺を見てクラスメイトが駆け寄る。

「…お前大丈夫かよ。腫れてんぞ、保健室だ、保健室。」

其のクラスメイト越しに関西野郎の視線が俺を射抜く。
周りの景色が止まる。

関西野郎とかち合った視線が逸らせない。
表情からは感情と呼べそうな類なものが全て消え去って、何も読めない。
ただ、立っている。

動けない。

関西野郎は少しの威圧感を滲ませて、俺の方へ一歩踏み出す。

動けない。

遠くでチャイムが鳴る。

「まったくしゃんとしろよ。」

動かない俺に痺れを切らしたのか、クラスメイトは右手を掴んで引っぱる。

その手に流されるまま歩く。

一歩二歩と関西野郎はゆるりと踏み出す。

距離が近付く。

「まったく、お前の幼馴染もキレーな顔して強えな。」

引っぱられる手の先から、呆れたような、そんな声。

アイツは悪くねーんだけどな。

何かもう全体的に力が抜けて、項垂れた俺をクラスメイトは気にせず引っぱる。

と、逆の手を掴まれて止まる。

「なあ、コイツ俺が連れて行くわ。」

聞きなれてもう違和感すらない関西弁。
バスケットをしている、長身に似合わず、其の容姿には相応しい綺麗な手。

其の力は右手を握るクラスメイトよりも遥かに強い。

「え、あ。」

戸惑いながら振り返り立ち止まるクラスメイト。

「な。ええやろ。俺コイツと話あるねん。」

関西野郎の纏う空気は固い。

それに比例するような掴む力の強さ。

其れの雰囲気気付いたのかクラスメイトは肩を竦めて言う。

「じゃあ、お前に任せるよ。」

離れた右手には全然力が入らずに、だらりと垂れる。

関西人はそんな俺の腕を血が止まるくらいに強く握って引っ張る。

為されるがまま。

行く先は勿論、保健室では、無い。

カンカンカンカン…

階段の其の上の古びたドアを開ける。
吹き荒れる冷たい風。

オマエはこの寒空の下で何を想う。

「ほんま、ボク阿呆とちゃうか。」

屋上に着いた途端、乱暴に離された手。

少しよろけながら、関西野郎の其の強い目を見る。
何故そんなにも強い。

動かない腑抜けた俺を見て、溜め息一つ。

その長い手足を持て余しながら振り返り言う。

「…はあ。そんなシケた面したヤツのことな、…」

すう。と息を吸ってから、関西野郎は其の整った顔を少しゆがめて続けた。

「怒られへんとかな、ゆうかボケ。」

本日二度目の乾いた音。

先刻よりも遥かに痛く、強い衝撃に耐える。
これは痕残るな。

空を仰ぐ。

冬の冷たく凜とした澄んだ空気が、熱い頬を冷やす。

其の冷えた優しさに居た堪れなくなつて、目をふせしゃがみこむ。

その俺の隣にしゃがんで、関西野郎は静かに言う。

「ほんまはな、俺の手、こないなことに使いた無いねん。」

彼の綺麗な手はバスケのスポーツ推薦で来た人の其れとは思えないほど綺麗。

男の俺が見ても綺麗だと思つほどすらりとして傷の無い手。

その大切な手を保つ努力をコイツが欠かさないことを俺は知っている。

知っているからこそ、其の怒りが痛く俺を刺す。

「俺な、ほんまはボクのこと応援してるねんで。」

その予想外に優しい声色に顔を上げる。

少し伸びた襟足が風に揺れて少しくすぐったい。

差し出されたハンカチ。

いつの間に用意したんだよ。

怒つていても氣遣いを忘れない、そんな彼に少し気持ちや和らぐ。

俺が増やしちやってんけどな、と苦笑しながら腫れた頬にソレを押し当てる。

「…………ごめん。」

俺の口から出た声は、小さく、すこしふてぶてしい。
何でこんな素直じゃねえ言葉になるんだろう。

少し眉間に皺を寄せた俺を見て、関西野郎は目を細める。
冬空に見合う至極綺麗な笑み。

絵になる風景に、少し息を呑む。

やっぱり俺は子供だな。

愛しい幼馴染を傷つけて、（不本意ながらも）大事な友達に気を使
わせて。

まじ馬つ鹿みてえ。

あんなに些細なことで嫉妬して、癪癪起こして。

できるだけ早く謝らないと。

ゆるりと沈黙は雲のように流れる。

俺も彼も誰も何も言わない。

まあ、立入禁止の屋上なんだから、現れる人なんて居るわけ無いけ
ど。

立入禁止…

「え？」

関西野郎はにたりと微笑む。

「ちよつと拝借して合鍵作つてみてん。ええやる。」

その手には銀色に輝く鍵。

悪戯に成功した子供のような笑顔。

これでいつでもサボタージュし放題やで。と

「何かお前らしーな。」

乾いた空気に小さな笑い声が響く。

よく見ようと手を伸ばせば、マジックの様に素早く鍵は関西野郎のポケットへと消える。

貸したれへんよ。って

そんな柔らかな時間を止めるように、

関西野郎は緩めていた頬を締めて、細めていた目を開き、強い声で言う。

「でもな、俺は同じ、いやそれ以上にな、お嬢ちゃんのこと大事に思ってるんや。」

言われた意味が、良く、解らなかった。

飲み込めない言葉を咀嚼するように、俺は唇を噛む。

其のあまりにも強い眼差しに、喉が鳴る。

「…そ、れ……って？」

喉から搾り出した声は掠れて、頼りない。
理解できなかったんじゃない。

認めたくなかっただけ。

何て幼稚で酷く滑稽な感情。

苦虫を噛み潰したような俺の感情を見抜いたように、
関西野郎は言葉を噛み砕くように言う。

「ボクがぼーっとしてたら、お嬢ちゃん、俺が貰うで？」

アンタは氣イ付いてへんかもしれへんけど、お嬢ちゃん結構モテてるんやで。

と。

あびきよーかん？
くーぜんぜつご？

「ボク、日本語勉強したほうがええで？」

言い残して去る後姿さえ優雅。

俺なんか到底及ばないほどできた男。

勝ち目は？

背後で閉まる屋上のドア。

吹きすさむ北風に目を瞑って、頭を抱える。

関西野郎は最後の最後で爆弾を落としていった。
それも、メガトン級の。

関西野郎に渡されたハンカチは、力を失った俺の手からひらりと舞い上がる。

その後を追うことさえできない。

それよりもなによりも、

俺、大ピンチ？

ってか、俺が貰う…って。

「冗談。だよ、な…。」

俺が冗談言う男に見えるゆうんか？

そう関西野郎が零したのはいつの日だっただろうか。

一刻も早く覚悟を決めなければ。

一刻も早く覚悟を決めなければ。

早く。早く。早く。

言いたい関係

きみが去ってしまう前に。

言いたい関係・後（後書き）

ということの後編どうでしたか？

あと二話くらいでホント終わらせる予定です。

でも前後編にはなるかもしれませんが、

できるだけ早く書けるように頑張ります！

それでは、読んで頂きありがとうございます！

言わせる関係

「あーッッ、もう、馬っ鹿みたい……」

「せやな、あの甘ボクちゃん……どーしょーもないやつちゃな。」

重ならない声。夕暮れ。センチメンタリズム。

- 言わせる関係 -

小さく零した、返事も何も期待していない言葉に返答があったことに別段驚くでもなく振り返る。

聞き慣れたイントネーション。聞き慣れたバリトン。

すこし肌寒いからと、首に巻いた白い薄手のマフラーがふわりと揺れる。

ベンチに長い足を器用に組んで優雅に腰掛ける関西人が視界に映る。

「……………ん。ってゆーか自分が。だけどね。」

振り向いたまま、ちょっと自嘲的に零したアタシに、関西のお兄さんは意外そうな顔。

ふん。

策士の期待を裏切れましたか？

憎らしいほど整った容貌に、置いて来たアイツを想って微笑む。

ただ、其の笑みがぎこちないことは、自分でも解る。

そんなアタシを見て彼は、肩を竦めて、魅せる。

その仕草は、幼馴染には無い。

ていうか、関西人も授業サボったのね。

しかしアタシが何処に居るかなんて良く解ったわね。

「悩めるお姫サマの元に現れる王子様の本能っちゅーやつ？」

素敵に長い台詞をどうもありがとう。

其のナルシズム的な言動も良くお似合いですこと。

王冠に紅いマント、玉座さえ見えてきそうね。

座っているのは只の駅前ベンチ。

少し腫れた目については何も言わないのね。

アンタの頬に触れた手が痛い。

関西野郎の腰掛けるベンチと丁度背中合わせになる様な、通りが見える、其の位置に腰掛ける。

背中越しに渡されるホットコーヒー。

どれだけ準備が良いのかしら。

アタシが答え易いようにか、軽い口調で彼は言う。

「じゃあ、あんなボクが好きな自分自身に厭きれるっちゅーやつか？」

やるじゃない。御名答。

「まあ、そんなとこ。」

指先から伝わる温もりに硬くなっていた心が和らぐ。
ほんと。憎らしいけど良いやつ。

「不本意。」

小さく零した言葉は駅前通りを行く人の足並みをぬって彼に届く。
言った意図が解らないとでも言う様に、彼はアタシの頭を軽く小突いた。

こっん。

「どーゆー意味なん。」

静かに彼は問う。

響くバリトンが鼓膜を叩く。

「其の俣だつて。不本意ながらアンタは良いやつだと認めざるを得ない、ってこと。」

くすり。と零れた笑みが大通りの少し汚れた空気を揺らす。
あたりまえやん。とでも言いた気に先刻よりも少し乱暴に、頭を小突く。

なんだかな。

ベンチの背もたれを越えて、関西野郎の頭がアタシの肩に乗る。少し赤茶けた髪の毛がマフラーの純白に映える。少し重いけど、まあ良いか。

「あんな、俺ボクのこと殴ったわ。」

遠い空を眺めて彼は言う。

その空は哀しくなる程、蒼く、高く、澄んで。

「そう。」

迷惑掛けたね。とは言わない代わりに彼の肩に頭を乗せて空を見る。はたからみれば至極滑稽な光景だと思う。

ベンチに背中合わせ、お互い目一杯反って頭を互いの肩に乗せあう。

「お嬢ちゃんは気付いてると思うけどな、アイツ……」

解ってるよ。解ってる。解ってる。

「嫉妬でしょ。」

アンタが肩抱き寄せてる間ずっと足踏みつけてたのにね。よく平然と立ってたね。

「まあ、アイツも反省しとるみたいやで。」

うん。

声に出さず、肩に頭を乗せたまま頷く。その頭を彼はぽんと叩く。

「でも、あんな風に言われたら、アタシだって自信が揺らぐの。」

だつて、ずっと、ずっと

微かに震えた声。

風が吹くと、止まった筈の涙が止まらない。

どうも今日は感情のコントロールが上手くいかない。

滲んだ視界を誤魔化す様に、目を開いて耐える。

「…ボクは、お嬢ちゃんのこと、ほんま、好きやで。」

噛み締めるように、ゆっくりと、彼は言葉をつむぐ。

その声に自嘲的な悲哀が見え隠れたように感じたのは気のせいだろうか。

瞬時、其の様子を消して彼は続ける。

「せやから、ここは一つ、賭けせえへんか？」

くらり、とくる低音。

耳元で囁く其の声。

賭け？と怪訝に聞き返す。

「せや、賭けや。」

彼は頭を起こす。

それに続くようにあたしも彼の肩から離れた。
冷たい空気がそれに合わせて揺れる、ふわり。

少しの沈黙。

言葉を促すように、風が頬を撫でる。

「賭け…。どんな賭けか教えて頂戴。じやなきや解んないし。」

貰った缶コーヒーのプルタブを爪で開ける。

よく見れば好みの味をばっちりセレクト。

ホント、どこまで用意周到なんだか、と緩む頬。

気配が揺れる。

関西人は立ち上がったみたい。

何をするかは知らないけど、変な展開。

首を傾げてまたコーヒーを一口。

ほう、と吐き出した息が空気を白く染める。

きれい。

その白が消えた先に関西野郎の姿。

その仕草に眩暈を覚える。

「俺と付き合わへんか？」

お姫サマ？と差し出された左手に硬く目を瞑る。

蕩けるようなスマイル。

あほくさ。

往來の視線が痛い。

「はぁーっ……………」

思わず漏れた溜め息。

コーヒーを飲み干して立ち上がる。

差し出された左手には空き缶を。

途端にたり顔の関西王子。

読めないな。

「（ああ、もう、何なんだコイツ！）……………アタシ、もう行くよ。」

「だから悩めるお姫サマの元に現れる王子様やって」

明らかあたしの考えは読まれてる。エスパーなのね。

律儀に缶専用のゴミ箱まで走る後姿を睨む。

アルミかスチールかもばっちり確認。

…あ、声掛けられてるし。

まあ、顔は文句のつけ様がない。これは周知の事実。

ふい。と後ろを向いて街に向かう。

「拗ねたん？」

嬉しそうに訊ねるその微笑に眩暈。

家路を急ぐサラリーマンとは反対に。

嬉しそうな声はスルーしてスタスタと歩き出す。

ざわめきの中で自分の足音は小さいながらも聞こえる。

ぱた、ぱた、ぱた。

幾らか進んだところで振り返る。

「ついておいでよ。」

新しい風。

王子は目を細めて笑う。

近付いてくる歩幅は幼馴染の其れよりも遥かに広い。

「付き合ってくれるん？」

耳元で囁くそのバリトンが極上の響き。
揺るがないように目を見つめて囁く。

「話くらい聞いてあげる。」

策士の目が止まる。
裏をかけましたか？

「来ないの？」

互いの笑みが深まる。

さあ、そろそろ前に進まなくては。

さあ、そろそろ前に進まなくては。

一歩でも、前に、先に、

言わせる関係

始まりは其の手の中に。

言わせる関係（後書き）

久々の更新でした。

そろそろ動きそうです。

またばちばち頑張りますので
長い目で見てくださいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9839a/>

青春バイタリティ

2010年10月28日08時01分発行